

1 学校教育目標	
<p>学校教育目標 生徒の個性を尊重し、伸ばし、一人一人の夢の実現を図る。</p>	
<p>綱領</p> <ul style="list-style-type: none"> — 自主積極研学の道に邁進しよう — 気節を尚び、礼儀を重んじよう — 質実剛健を旨とし、勤労を愛しよう 	<p>校訓</p> <p>「自主」「礼節」「勤労」</p>
<p>県教育委員会各課の本年度の教育指導の重点及び取組の方向を踏まえ、本校の「綱領」並びに「校訓」の精神を柱とし、松高スピリッツ（品性を磨き、感性を高め、徳性を養うことで、明るく生き生きとした活力あふれる生徒を育成する。）の具現化に向けた教育を実践する。</p>	

2 本年度の重点目標	
1 生徒の健全育成	
<p>(1) 生徒指導方針の共通理解及び全職員協力体制により、生徒の基本的な生活習慣を確立し、規律ある生活態度を育成する</p> <p>(2) 挨拶の励行・整った身なりの指導に取り組み、社会人としてのマナーを育成する。</p> <p>(3) 人権尊重意識の高揚に取り組み、家族を大切にする、友人に優しくするなど他人への思いやりの気持ちを育成する</p>	
2 基礎学力向上の推進	
<p>(1) 教職員が、生き生きと主体的に学ぶ姿勢を持ち続ける</p> <p>(2) 自ら課題を見つけ、解決に向けて協働して取り組む探究的な学びを推進し、教科を横断した「学び」への意欲を向上させる</p> <p>(3) 主体的・対話的に考え抜くことで、深い学びとなる授業を創造する</p> <p>(4) 様々な教育活動において、「学びの手段」としてのICT活用を推進する</p>	
3 進路指導の充実	
<p>(1) 生徒一人一人の能力・適性等に応じた指導を徹底する</p> <p>(2) 大学入試・公務員試験・就職試験などに対応できる基礎学力指導に取り組む</p> <p>(3) 将来の自分の生活設計が見通せるような資料の提供や、教師自らの体験談を日常的に語るHR活動に取り組む</p>	
4 本校への入学者を増やす取組	
<p>(1) 学校説明会等の強化促進と情報発信（HP、LINE、マスコミ等）の工夫に取り組む</p> <p>(2) 地域の行事やボランティアへの積極的参加により、地域連携を強化する</p> <p>(3) 松橋高校だからできる各学科の魅力づくりに取り組む</p>	
5 組織的に動く指導体制	
<p>(1) 松橋高校のためにどうすべきかを考えた学科間の連携強化に取り組む</p> <p>(2) 危機管理（起こさない取組・起こった後の対応）は、「チーム松高」として組織で統一してあたり、特に初動対応は、重点的に取り組む</p>	

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	教育方針に基づいた、学校教育目標の達成及び業務改善の推進	学校活性化のための特色ある教育活動の展開	○次年度からの学校の変革を見据え、教育活動の特色化及び中学生や保護者に向けて、その魅力発信が十分なされ、「変化」と「期待」が学校内外で感じられ、最終的には志願者が増加す	①各学科間が連携した「チーム松高」として、地域との連携を強化し、本校の魅力化を推進し、学校活性化に繋げる。 ②教育活動を広報する機会を増や	B	○本年度スタートした松高DX部の活動を魅力の一つとして地域や、小・中学校に発信することができた。 ○学科横断で探究的な学びに取り組む「松高フードコート」構想として、地域の方々と連携し

			る状態	し、広報内容の充実を図って、積極的に情報を発信する。 ③学校 HP や安心メール、学校パンフなど様々なメディアを活用して各種教育活動の魅力を発信して、本校を積極的に紹介する。		た学びが始動した。 ○これまで実績がある高校生道の駅弁当の取組を、次年度の学科横断的な連携に向けて動き出すことができた。 ●生徒・保護者において本校の変化・魅力が伝わっていない点が一部見受けられる。校内外を問わず、HP、広報紙、学校パンフをさらに進化・発展させて、発信する必要がある。広報紙は、管内だけでなく、管外中学校、そして地元事業所等にも配付して、広報をお願いしたい。
	目指す生徒像、学校像の実現		○生徒が主体的に学び、考え抜く教育活動（授業や行事等）を展開している状態。 ○全職員が連携して学校教育目標の具現化を目指し、地域からは学校に対する高い信頼が寄せられている状態	①生徒個々の多様な能力・関心を生かし、協働して課題解決に取り組む探究的な学びを推進する。 ②在籍する生徒が誇りを抱くような教育活動を全教科において展開する。 ③学校行事の際などに、活躍する生徒の姿を見てもらう機会を数多く設ける。	B	○①クリエイトハイスクール「松高フードコート」構想における探究の学びを推進し、オンラインで全校での中間発表会を行うことができた。 ○②クリエイトハイスクール「松高フードコート」の取組に着手できた。今後、学科横断的な学びをキーワードにさらなる具体化を目指す。 ○③今年度もコロナ禍のため校内に外部から保護者等を招いての教育活動を紹介する機会がなかったが、諸行事を全職員・全生徒で協力して実施し、保護者に向け広報することができた。
学び合い高め合い 支え合う職員集団及び働き方改革	持続可能な教育活動を目指すため業務改善意識の向上および時間外勤務の削減		○職員間の意思疎通ができる風とおし よい状態 ○スクラップ & ビルト およびICT活用で仕事効率がこれまでより上がった	①日々のコミュニケーションを図り、職員朝会や運営委員会、職員会議をとおして、組織の共通理解を図りながら業務を	B	○①2月10日時点で運営委員会16回、職員会議12回を開き、組織の共通理解を図りながら業務を進めることができた。 ○②会議や委員会等の開催は必要が

			<p>状態 ○職員がストレスを軽減し、心身ともに健康な状態で教育活動に当たっている状態</p>	<p>進める。 ②スクラップ&ビルド（会議や打合せの整理・削減を含む）や次年度引き継ぎを意識した取組で、業務のスリム化を進める。 ③年休などが取得しやすい雰囲気作りや行事予定策定を行う。</p>		<p>あるものに精選し開催できた。 ●③行事予定の早期の策定に努め、年休等が取得しやすい環境作りは進めることができたが、一部の職員に業務が偏る傾向は課題として残る。</p>
		教師としての使命感の向上と資質の向上	○職員が指導力向上のために自己研鑽に努めている状態（不祥事ゼロの状態）	①職員研修を計画的に実施する。 ②観点別評価や探究活動について、校内研修や視察等による研修を実施する。	B	○①人権研修や不祥事防止をはじめ、探究の学びや対人コミュニケーションをテーマとした職員研修を計画的に実施することができた。 ○②探究活動については、スーパーティチャーを招き、職員研修を開催し、職員の共通理解を深めた。
学力向上	教師の指導力向上	「分かる」授業の工夫と確立	○主体的・対話的な授業を展開し、生徒の深い学びにつなげることができるような授業を目指す。	○効果的なICT活用を含めた授業を研究する。	B	●研究授業週間だけでなく、日常的にICTを活用した授業を研究する教員が増え、生徒の深い学びにつなげることができた。すべての教員が効果的にICTを活用し、生徒の深い学びにつなげられるようになることが課題である。
		観点別評価の推進	○定期考査だけでなく、日頃の授業の取組の評価など多面的評価を行う。	①定期考査の問題を工夫・改善し、生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばすように教科会等で検討を行う。 ②授業中の課題・成果物やアンケート等を観点別評価に取り入れる。	A	○定期考査では、どの教科においても知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力を問う問題が常に出題されるようになった。 ○授業中の成果物等を、電子媒体を含む様々な形で提出させることができる教員が増え、これまで以上に多面的な評価ができるようになった。

	基礎学力の定着と学習習慣の確立	自宅学習の確立と定着	○通常1時間以上、考査前2時間以上の自宅学習を定着させる。	○定期考査前に限らず、スタディサプリ等を活用して定期的な自宅学習の課題を提示する。	C	●スタディサプリで毎週1時間程度の課題を配信したことで、定期的に自宅学習に取り組む生徒は増えたが、全生徒数からするとまだ少ない状況である。
キャリア教育(進路指導)	進路意識の高揚	3年間を見通したキャリア教育の推進	○卒業後の進路選択によって自分がどう生きていくかを考えさせる。 ○社会で生きていくために必要なマナーや自分の考えを伝える力、話を聞き理解する力を習得させる。	定期的に進路だより【羅針盤】を発行し、タイムリーな情報を提供して意識啓発に努める。 1年次:進路講演会やガイダンスを通じて『仕事や学問』について学習し、また適性検査などを活用して自己を知り、進路選択を行ううえでの材料を見つける。 2年次:「進路目標の確立」を目標に、ライフプランニング授業による将来の生き方を考えさせ、学校説明会、オープンキャンパスへの参加を促し、進路ガイダンス等を実施し目標を明確にする。また、1, 2年次に「インターンシップ」への参加を促す。生徒自身が体験したい実習先にアポイントを取り、受入可否の確認から実習まで自主的に取り組むことで主体性を育む。教師は、マナー研修や事前事後の取組み等支援する。 3年次:「卒業生講話」「	B	○【羅針盤】を月1回の割合で発行できた。 ●保護者が本校の活動や進路情報を確実に見られるようにすることが課題である。 ○進路関連行事は各学年とも予定どおり行うことができ、進路意識の啓発を進めることができた。 ○インターンシップは、夏場にコロナウイルス感染が拡大した影響で予定者数の半数しか実施できなかったが、生徒は企業研究やマナー学習など積極的に活動した。実施できた生徒は、いずれも受入企業の評価が高く生徒自身も進路決定に向けて肯定的な評価をしていた。 ●インターンシップを希望する生徒を増やすことが課題である。

				企業懇談会」「出前授業」等でより詳細な将来の生き方を選択できるように促し、進路実現を目指す。		
	進路目標の達成	進学や就職に向けての早い段階からの取組	○2年生の3学期までには、進学か就職かを概ね決定させる。 ○3年生の進路実現	①2年2学期までの様々な進路の取組みで進路目標を確立させ、2年3学期に就職希望者（就職がイッス）、進学希望者（小論文がイッス）に目的を持って参加させる。また、合同企業説明会で企業の話や具体的な企業、業種、職種および進学先を絞り込む一助とする。 ②3年では、それぞれの試験に向けて具体的な取組を実践し進路実現へとつなげる。	B	○①予定された進路行事が実施でき、生徒の感想からも有用な行事となったことが伺えた。3学期の進路行事や進路指導部面談を通して、次年度に向けて良いスタートが切れるように取組む。 ○②3年生就職希望者は12月までに決定した。進学希望者は若干名未定ではあるが、全体としては概ね順調に進路決定ができた。面接対策、小論文対策、課外、個別添削など進路実現に向けてサポートができた。
生徒指導	「松高マナー」の涵養	正しい制服着用、元気な明るいあいさつ、正しい言葉遣いができる	○校内外を問わず、正しい制服の着用をする。 ○校外でのマナーの遵守。（松高マナー・交通マナー等）	①授業始業の際に、服装を正させる。また、元気な明るい挨拶を促す。 ②授業時の発問に対して、正しい言葉遣いで回答させる。 ③学校生活全般において、タイムリーに指導する。	B	○登校指導の際に制服の着こなし、大きな声での挨拶等を指導することで授業始業時の挨拶や返事等にも良い影響を与えた。
	交通指導の充実	毎月の交通安全呼びかけの運動	○交通委員に自覚を持たせ、交通安全の日を活かしながら全校生徒に対して交通安全の呼びかけを行う。 ○ながらスマホ根絶等のマナー向上を訴	①交通安全の日（毎月10日）に学年当番で、教師と交通委員で啓発活動を行う。 ②特に自転車・原付バイク通学生は交通ルール、天候	B	○毎月、交通委員を中心に交通安全の啓発活動ができた。交通事故や苦情がゼロでは無かったが、その都度の対処はできた。

			え、外部からの苦情をなくす。	や道路状況、車両の特性を理解して運転するように、定期的に指導する。		
		二重ロックの徹底	○全校生徒への呼びかけ運動を継続して行い、常に二重ロックの施錠率を毎月80%以上にする。	○毎月の交通安全の日にチェックをし、啓発活動に努める。また、チェックしない日の施錠率を上げる呼び掛けをする。	C	○毎月のチェックは出来た。 ●施錠率が約77%と目標値に届かなかった。
	生徒会活動と部活動の活性化	部活動加入の奨励と各種大会やコンクール等への積極的な出場	○学校行事に対する全校生徒の意欲を向上させる。 ○部活動加入率を高める。	○部活動紹介や体育大会・文化祭などの学校行事を通して、勧誘を呼び掛けながら関心や興味を引く。	B	○感染症予防を行い、制約の中で可能な体育的・文化的行事を行い、生徒達の、生き生きとした姿を見ることができた。 ●部員や顧問が、呼び掛けを行ったが、部活動加入率を高めることはできなかった。
人権教育の推進	人権意識の涵養と差別意識の解消	教職員の研修の充実と推進体制の機能強化	○管理職の指導により、人権教育主任が役割を自覚し、各部・学年と連携を図り取り組む。 ○校内外研修の充実を図る。	①人権教育推進委員会を中心に、人権学習LHRなど様々な取り組みを発信する。 ②同和問題の解決を中心に据えた校内研修を実施し、職員の人権意識を高める。 ③校外研修に積極的に参加し、その成果を復講する。また、レポート研修を実施する。	B	○人権学習LHRは、人権推進委員会のなかで検討、改訂を行いながら実施されたので、各学年ごとの意向を反映できた。 ○計3回の校内研修において、いずれも同和問題に関する内容を取り上げており、その解決を中心に据えた研修を行った。第3回の校内研修では職員全員によるレポート研修を実施した。
		生徒の人権学習推進	○全教育活動に於いて、人権教育の視点を持ち取り組む。 ○人権教育LHR、人権週間における取組を計画的に行う。	①主に人権学習LHRを通して、身近な人権問題や同和問題などの社会的課題に至るまで学習し、反差別の実践的な態度を養う。 ②自分とは違った考え方を尊重して相手を大切にす	B	○人権教育LHRでは就職における差別事例を取り上げ、身近に起こりえる人権問題として学習した。また、人権啓発週間を設けることで人権感覚の涵養を行った。市町村が行う人権行事には、多数の本校生徒がボランティア要員として参加している。

	<p>特別な支援を要する生徒への個に応じた支援</p>	<p>職員の理解と意識の向上</p>	<p>○特別支援教育・高校通級（LST）・インクルーシブ教育システムについての理解を深め、スキルの向上を目指す。</p>	<p>思いやりを持つ。 ①「生徒理解研修」時に、LSTの説明や授業の様子等を説明する。また、より多くの職員のLSTの授業参加を促進す。 ②LSTをゲストティーチャーにより実施する場合には、見学ができるように職員へ周知する。</p>	<p>B</p>	<p>○①LSTの様子については「生徒理解研修」「総合支援推進室会議」において、授業及び生徒の様子を伝えることができた。また、授業によっては複数の先生方が参加されることもあった。 ○②特別支援教育課のLST視察の際などには職員へ周知し、オンラインで見学していただくことができた。</p>
	<p>支援を要する生徒への個に応じた適切な指導の充実</p>	<p>○支援を要する生徒の理解を深め、個に応じた支援を推進する。 ○生徒、保護者の教育的ニーズを理解し、合理的な配慮を行う。 ○インクルーシブ教育システムの構築に向けた取組を行う</p>	<p>①新生生についての「第1回生徒理解研修」熊本県が定めるガイドラインに沿って、個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成し「第2回生徒理解研修」を行う。また、「第3回生徒理解研修」において支援の評価を行う。 ②週1回「総合支援推進室」を開催し、生徒の情報共有・支援策の検討を行い、必要に応じて生徒や保護者がスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの支援を受けられるようにする。また、各評価等は「生徒支援推進委員会・特別支援推進委員会」にても行なう。 ③生徒本人や保護者より合理的な配慮についての申し出があった際</p>	<p>B</p>	<p>○①個別の教育支援計画・個別の指導計画については、熊本県が定めるガイドラインに沿ったかたちで作成し、研修を行うことができた。また、特別支援教育コーディネーターが三者面談等に同席し、合理的な配慮についての説明や支援策の提案等ができた。 ○②「総合支援推進室会議」を週1回開催し、生徒の支援策検討や専門家へ繋ぐことができた。「生徒支援推進委員会・特別支援推進委員会」では、LSTの受講に関する制度、評価等を主に議論し今後に向けての改善点を見つけることができた。 ○③状況に応じて、特別支援教育支援員の配置を変更しつつ対応ができた。</p>	

				には、校内で検討し特別支援教育支援員が学習支援や健康・安全確保等を行う。		
	命を大切に する心を 育む指 導	自他の生命を尊 重する心の育成	○「心のきず なを深める月 間」の取組を 行う。 ○「ストレス 対処教育」を 全学年で行う 。	①月間の周知 と涵養 ②心のきずな を深めるため の標語づくり ③心のきずな を深める詩の 紹介 ④1年「私の 四面鏡」「二 者択一」2年 「さわやかな 自己主張」「 月からの脱出 」3年「アン ガーマネジメ ント」の実施	B	○「心のきずなを ふかめる月間」の 取組①生徒会考案 の標語を各クラス に掲示し、月間の 周知を図った。② 人権推進委員会と 連携し、全校生徒 による標語の作成 を実施した。 ③相手の立場に立 った言動の重要性 について考える詩 の紹介等を生徒会 と連携して行うこ とができた。 ④「ストレス対処 教育」については 、教材をより本校 生に合うように改 良した。また、ス クールカウンセラ ーに資料提供や動 画に協力してもら うことで、スクー ルカウンセラーの 活用もできた。
いじめ の防止 等	いじめの 未然防止	生徒・職員・保 護者のいじめ防 止に対する意識 の向上	○集会や講演 会、研修会を 積極的に行い 、いじめ「ゼ ロ」を目指す 。 ○校内のいじ め根絶に向け た体制の充実 を図り、学校 内の言語環境 を整える。	①集会や講演 会、研修会を 行うことで自 己肯定感・自 己有用感を高 め、いじめに 負けない集団 を作る。 ②各教科やホ ームルーム活 動において、 現代社会にお いて起った事 件等について 考える時間を 作り、生徒達 と向き合う時 間を確保する 。	B	●SNSによるやりと りやオンラインゲ ームの中での言葉 の行き違い等が見 られ、コミュニケ ーション能力や言 語環境に課題があ ると感じる。
	いじめの 早期発見	いじめ早期発見 に向けた取組の 充実	○心のアンケ ートなどを活 用し、いじめ の早期発見に 努める。 ○いじめに関 する通報（ス クールサイン） 及び相談機 関を生徒、保	①定期的なア ンケートの実 施と情報分析 をし、職員間 での共有を図 り、早期発見 ・早期解決に 努める。 ②日頃からス クールカウ	B	○アンケートの結 果をもとに会議 を開き、状況の把握 と対応策の検討を 行い早期解決に努 めた。また、ス クールカウンセラ ーやスクールソー シャルワーカー等 の外部機関と連携が

			護者に周知徹底する。	セラ一等の外部機関とも連携を取り、初動対応を迅速に行う。		とれており、医療機関にも迅速に繋ぐことができた。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	地域活動への参加	地域ボランティア活動への参加	○宇城市や各地区の実行委員会との連携を図り、生徒へ情報を発信する。	○各実行委員会等との連携を図り、企画やボランティア活動へ積極的に参加する。	C	●新型コロナウイルス感染症の影響で、生徒が参加する機会が少なかった。
		地域貢献活動への参加	○各市町村や地域の方々との連携を図り、生徒へ情報を発信する。	○宇城市役所、宇城商工会等との連携、街なか図書館との交流を図る。	C	●新型コロナウイルス感染症の影響で、生徒が参加する機会が少なかった。
	保護者・同窓会との連携	PTA・同窓会行委への参加・協力	○喫緊の課題である定員割れの解消に向け、PTA・同窓会と協力して広報活動や中学校訪問を行い、入学者増を目指す。	○学校案内パンフレットを中学生にとって魅力的な形に全面的に改定したり、各学科の紹介チラシを定期的に作成したりして、各中学校等に配付し学校の取組を周知する。	B	○学校案内パンフレットの内容を検討し、魅力的な内容とした。生徒の活躍を紹介する広報誌を発行し、様々な活動を紹介した。
	学校運営協議会の推進	学校運営協議会の開催	○学校運営協議会を開催し、学校とメンバーが力を合わせて学校の運営に取り組むことにより、地域と一体となった特色ある学校を目指す。	○学校運営協議会を定期的で開催し、メンバーからの意見を聞き、特色ある学校づくりにつなげる。	B	○6月と2月に開催、本校の現状や取組を振り返るとともに、委員の皆様から貴重なご意見を伺う機会となった。

4 学校関係者評価

- 中学校時代に不登校傾向だったが、入学後に意欲的に頑張っていること等は、非常に価値ある成果ではないか。
- 先生方の日常、学級、学年、進路指導、生徒指導におけるきめ細かな対応がなされていることが理解できた。学力差が大きい中、個々の特性、学力に応じて進路指導がなされていることも理解できた。
- 学校の教育活動の取組は、素晴らしい。地域との連携、情報の発信、生徒個々の頑張り、進路状況等、学校の取組としてやれるだけのことはなされている。
- 地域連携推進委員会がとても大きな役割を果たしていた。行政や地域と連携を取り、広報を利用して生徒の意識が変化したのではないか。机上の学びだけではなく、人や社会との関わりの中で学ぶことが本校の強みとなると感じる。
- 総務部におけるPTAの豚汁作りは、コロナ禍で今年度も実施できなかった。次年度は実施したいと考えており、PTA役員内でもその意識作りをしていきたい。
- 高P連中央地区の幹事校として、今後も学校と連携を密にして取り組むことができた。

△自然環境問題が引き起こす様々な災害、感染症問題、また国家間の侵略など何が発生するか不透明な時代。討論できなくとも新聞や報道から感じたことなどタイムリーに話す習慣を付けて自分の意見がはっきり言える人に育ててほしい。また、男だから女だからではなく、一日の人間として社会で交流しながら360度から物事を捉え考えることができる人として成長することを期待するし、そのような教育に取り組んでほしい。若い感覚で世の中を変えていくような松高生であってほしい。

△学び直しが必要な生徒がいる中、個別対応が求められている。焦点をどこに置くか、誰1人取り取り残さないことが公立学校の使命であり、困難さを伴うものだと考える。

△元気な声で明るい、笑顔の挨拶は、人としてのマナーなので習慣化していくことが大事である。

△成人年齢が18歳に引き下げられ、現実の大人の社会に踏み出す卒業生には社会の現実、法律、契約、金銭問題等、様々なことについて一応の教育が必要となってくる。

△特別支援教育が必要な生徒が増加傾向にあるが、松橋西支援学校高等部との連携、教員の研修等に取り組みが必要となる。

△志願者の激減で学校の対応も大変だと思うが、中学校の進路指導とも連携が必要。

△生徒募集について、定員割れは仕方ないとしても、更に進む現状を阻止する具体的な方策を考えてほしい。

5 総合評価

昨年度までの評価項目を各部署で点検し、本校の現状、時代や地域のニーズに合わせるため、目標、方策、そしてアンケート項目に取り組んできた。アンケート自体も昨年度までのマークシート回答からICTを活用した回答方式に変え、比較分析がしやすいようにしており、次年度以降もこの方式を継続したい。

評価結果については、概ね好意的な評価であったが、「自宅学習の確立と定着」、「部活動加入率の向上」「地域貢献活動への参加」等に関して、評価が低かった。今後はコロナウイルス感染症の影響が少なくなり、改善することを目指したい。本校ICTの環境や研修が進んだのも今年度の大きな成果である。ICTを活用した学習だけでなく、教職員の授業改善と業務効率化を進めることができた。それが生徒・保護者、そして職員のアンケート結果にも表れていた。

6 次年度への課題・改善方策

【課題】

- ①本校の魅力の確認とその情報発信
- ②基礎学力の定着と学習習慣の確立
- ③部活動の活性化
- ④地域ボランティアや貢献活動への参加

【改善方策】

上記①～④は、本校の生徒・職員が課題を意識し、一つ一つ丁寧に取り組むことで、課題の解決に取り組んでいきたい。

- ①については、今年度模索しながらも進めてきた取組（松高フードコート構想、探究学習、one team事業など）を継続し、情報発信を宇城市内に留まらず、市外の中学校にも発信していきたい。
- ②については、1人1台端末を活用した授業改善や観点別評価を意識した授業改善をさらに進めるとともに、生徒には学ぶことのおもしろさ、学ぶことの意義、そして主体的に学び続ける大切さを教務部、進路部を中心としながら各学年部で取り組んでいきたい。
- ③今年度発足した松高DX部は、eスポーツ、デジタルボランティア、デジタル防犯等、生徒のICT技術向上のみならず地域貢献にも携われる機会を提供する部活動である。今後も地元宇城市や宇城警察署と連携を中心に幅広く活動し、発展に取り組んでいきたい。
- ④今年度も、様々な制限がありながらも生徒・職員が可能な範囲で地域貢献活動に取り組んできた。次年度も感染状況を考慮しながら、精一杯取り組んで、『宇城の人材を育てる松橋高校』に取り組みながら、地域での生徒自身の学びや、自己肯定感、達成感を高めていきたい。